

## 心の目と人権

島根大学教育学部附属義務教育学校 七年 大櫃愛莉

「心の目を持ちましょう。」

この言葉は、小学校三年生の頃の担任にたくさん聞かされていた言葉だ。当時の私は全く「心の目」という言葉の意味が分からず、考えるほどでもないと思い特に気にしていなかった。しかし、現在ではこれから生きていく上で必ず心に持つべき考えだと考えている。

私の父は、障がい目が見えなくて不自由だ。そのため、普段の生活では何かしらの形でサポートを受けている。歩く時は白杖を持ち、長距離の移動はバスやタクシーを使う。昔の私はこれらのことが気にならなかった。友達に、自分の父が目が見えない人だと知られたら恥ずかしかったからだ。そのため、授業参観などの学校行事には、白杖を持ち歩いてきたり、母やヘルパーさんの肩をかりて来たりはしないでほしいと思っていた。

ある時、盲導犬と、盲導犬と共に生活している三輪さんとの特別授業が行われた。クラスメイトのみんなと三輪さんの話を聞き、先生がよく仰っていた「心の目」について考えるという授業だった。みんなは楽しそうに授業を受けていたが、私は複雑な感情でいた。なぜなら、父の障がいは遺伝するものであるため私もいつか今のように生活できなくなってしまうからだ。一度はしてみたい自動車の運転も、好きな職に就くこともできなくなっていく。自分の運命を勝手に想像し、将来にマイナスな感情を持ったまま授業は終わった。もちろん「心の目」についても何も分からなかった。

数年たった時、今度は社会で憲法の学習を行った。私はもともと法のことに関心があったため、普段の授業よりも一生懸命に取り組んだ。そこで、基本的人権というものを知った。基本的人権は、人が生まれながらにして持つ権利を尊重することであり、基本的人権が保障されている限り、私達は平等に生きていくことができる。私は基本的人権のことを完全に理解したような気がした。

数週間後、授業参観が行われた。母は仕事だったので、代わりに父が私のことを見に来てくれた。もちろん白杖と共に。憲法を学ぶ前の私だったら、父にコッソリと白杖をしまうようをお願いしたろう。しかし、憲法を学んだ後の私は父に、

「十分くらいしたら帰ってくれない。」

と、お願いしたのだ。現在となっては考えられない行動だが、当時の私は間違った基本的人権の認識をしていたのだった。

その日の夜、父は三輪さんのことを話してくれた。盲導犬学習で分からなかった心の目のことや、なぜ三輪さんが盲導犬と共に生活しているのか。それらのことを話している時の父は、何かをうったえるような表情をしていた。

基本的人権とは、人が生まれながらにして持つ権利を尊重することであり、基本的人権が保障されている限り、私達は平等に生きていくことができる。布団の中にもぐり、父が言いたかったことを考えた。そして、今まで起こったことから、基本的人権と心の目の関わりを

自分なりに考えた。

私が考えた「心の目」とは、自然に相手を思いやることである。心の目を持つことで、相手も生きやすくなり、個人個人を尊重できる。それらが、基本的人権の考えと結びついていると考える。このことを翌朝父に伝えにいくと、父は

「おお、そうか。」

とだけ言い、笑った。

それから私は「心の目を持つ」ことを常にこころがけている。小さな子供や高齢者の方にはバスの席をゆずったり、父が歩く時には肩をつかむことや、白杖をついていることも良いことだと思い始めた。

現代社会には、心の目を持つことが重要になる場面がたくさんある。そのため、これから生きていく上で必ず心に持っておく考えだと強く感じる。みなさんも一度、「心の目」について考えてみてはどうだろう。やさしい世界にきっと近づくことだろう。